

白 虎 隊

岡村 敦 正

をさならがいのちひたすら朝明けの山路越ゆるとしはぶきもなし

(明治元年八月二十二日)

精根盡きゆくを冲天の焰赤々と斯くは死すべきいのちなりけり

(全八月二十三日飯盛山上自刃)

まつしぐらに七夜さを未だ暮進れると便り絶えしは母ののたまふ (弟)

明日は前線にたつといふ弟の便り強きことのみ書きて短かし

父も母もいまさねばひとり耐へつつにをさなき胸は病みたまひけむ

(悼 静子様)

三十にして血壓すでにたかしとふおのれしみじみじめにをりぬ

ワツセルマン氏反應陰性といふ看護婦のこゑすがすがうべなひあたり

(血液検査)

姓名判断観る人ありてひとつ處に吾の落付かぬ性は言ひしも (流轉)

嵐

六月二十九日横濱女子師範グラウンド崩壊罹災者を善行寺に收容す

嬰子を抱ける腕のしらじらと夕べ冷たき軀に對す (出征兵の妻)

避難民にをとめ交れりしかすがに歸りゆけるをさびしみにけり

嵐雨なごりなくして木立梢沁み入る丘の松蟬のこゑ

コーラスの流れよどまぬ聲ありて青々と空は晴れにけるかも

鶴見工場街を往く

大機械唸りたちくる朝明空おびただしくも陽ににぎりたる

母を思ふ

小林 學 山

常日頃親に對し強情で不孝者であつた私も、病氣になつて初めて親の恩を知つた。醫者も博士も見離した大病人を思を引き取る臨終の際迄助けようとするのが肉親の親の心であらう。私が臥つて以來父と母は全く氣狂ひの様になつて了つた。育てた吾が子は次から次からと死んで了ひ、最後に残つた私を「此の子だけは」と士官學校卒業の日を待ち焦れて居た父母、學校も途中で死の床に苦しみ悶く私の姿を父母は何と眺めたであらう。あれ程すきな晩酌を決然と止めて薬代に替へ、又九大の博士の來診を乞ふ爲には二百圓近くの大金を投げ出す父であつた。多久村の民間薬が効くと教へられてはその晩の内に六里の夜道を厭はず買ひ求めて來る母、いよいよ病勢が募つてあらゆる醫藥も駄目だと悟つた時「此の上は神様にお縋りするより他に道なし」と

大資本ここにゆりいでて晝も夜も人の神經はおびやかすなる
大機械どもす聞けば宗教てふ理念もつひに遠き思ひす
小鳥さへこゑに鳴かなくひねもすを煤煙よどめるこの街空は
宗教家てふ思索もなくてひと日けふ軍需工業の衝に疲れし
眞夏日に萎へ盡したるものの翳。青稈粟の色おとろへす

わ か れ

まみ涼しき妹ゆゑにひめしおもひさへすべなく山を明日去なむとす
淡雪の光のなかに立ちなげく妹ゆゑ耐へむ心くづれつ
はかなかる思ひにふたりあるさへや枯葉は山に音たてりけり

○

電報を受けしたまゆら召集とこころ決めにけり祖母死にたまひし
祖母上を逝かせまをして身の不精の悔なしとならず一の孫われ

續 岡山に遊ぶ

道路標識朽ちかたむけり赭土のこの山路は吉備につづくかも
岩影をたたへて深き青淵に木々の紅葉の散るしきりなさ
背戸庭に柿の熟れ實をちぎりつつ戦さに死にし次郎思ひをり
日もすがら疊表を織りつつに村の處女はさびゆくならむ
おのがじし蓄へきそひ親しまぬ村人らなりなかに吾が住む
さむざむと遠山しぐれ夕づくを蘭田打ち人ら未だ歸らず
蘭田水をかくるモーターの音とどろひびくに寒き十三夜月

かねて靈驗灼かと聞いて居た川上の寶塔
様へ三年間跣足詣りの大願をかける母で
あつた。一口に三年さいふものゝ雨の日
も風の日も嚴寒凍る雪の日も三時に起き
て水垢を取り、往復五里の山道を跣足で
詣る母、これを理窟で解決することが出
來ようか。身を捨て、たゞ一途に我が子
助け給へと神に捧ぐる一念凝つて立つる
大願、何で他人が立て、くれよう。肉親
の親なればこそ。噫、併し何といふ皮肉
であらう。私の病氣は日に、重くなる
ばかりだつた。私は幾度死生の境をさま
よつた事か。

忘れもしない昭和六年の春四月、釋迦
如來御降誕ましましし花祭りの祝日だつ
た。午過ぎ何時もの如く勤務先から歸つ
て来た父は枕元へ坐つて、「氣分はどう
だ、苦しいか？」と尋ねてくれるのであ
つた。「阿父さん。私も後二三日持つま
いと思ひます。生きて居た間親不孝の數
々本當に済みません。此の世の御別れに
御經の聲を聞いてそれを便りに冥途へ行き
たいと思ひます。何卒坊様を連れて来て

朝明けの田の面の薄氷割りつつに蘭植ゑす人らはやありにけり
戸を開けてすなはち向ふ枇杷の木の花しらじらと朝しぐれ空
茶の花は冬陽のなかにうす甘し小蛇らあまた下ごもりつつ
風がはこぶ雪さらさらと朝庭は萬両の實の赤かりにけり

隣家の糶摺る音のひびきつつ午すぎてよりつひに曇りぬ

春日光照りしづもれる瀬戸の海の未だも寒し青き潮騒(國立公園鷺羽山三首)
磯山の木の間ゆたてる千鳥かも高くは飛ばすこゑすくみ鳴く

うらうらと麥生明るく照り和みすでにしひばり高鳴けるなり
ひさしくを大忠の微望達せずとおのれ厳しく説きすすめつつ (日蓮上人)

勅語奉讀にも居眠れる多しうつつとなにを夢みるこの人らども
霜け田の水に照りしむ日のぬくさ蘭草は青く芽にたちにけり

植ゑつけしちさはまろ葉の顯たぬ間に吾れ岡山を去るべかりけり(三月十日)

煩悩讃歌

後藤龍子

ひたすらな昂に驅られ歩む道さるすべりは紅く花咲きてをり
さるすべりの紅き花瓣に燃えつきて我執さながら陽は照れりけり
思念いまに對へるものを超えにけりカンナの花の血ともゆる晝
咲き照れるカンナの花にむきたちて美を認めしはいつよりなるか
日没の照り衰へて風吹けりうつつとおもふわが肉體に
日ならべて降る雨寒く秋に入り聾者のごとく夜々をこもりぬ
空罐に花植えて愛で育くむは趣味ならねども樂し朝朝

下さい。」と言つた時父は兩眼から涙を
はら／＼と流して、「そうか。そんな
に悪いのか。よし暫らく待て、今すぐ本
行様に御願して来るからな。」それから
物の一時も經たない内に父は本行寺上人
を伴つて歸つて來た。上人は酸素吸入を
して居る私の衰弱しきつた姿を見て驚か
れた様子であつたがやがて御經を訓讀で
靜かに讀み始めた。今迄母の信仰を馬鹿
にして居た私も此の時ばかりは泣かずに
居られなかつた。この御經を便りとして
冥途に逝かなければ他に便るものとてな
いと思ふと上人の御經の一聲々々が全身
に滲みわたるのであつた。「妙法蓮華經勸
持品第十三……」

此の經文の意味、それは今を去る三千
年前、大聖釋迦牟尼佛が印度に仰入滅の
際御弟子方を集め給ひ「汝達よ吾久しか
らずして世を去るべし。されば吾がなき
後に我に代りて如來の使となり三惡道の
衆生を教へ導きてその苦しみを救ふは誰
ぞ。」と尋ね給ひしとき。藥王菩薩、樂
說菩薩その他御弟子の方々が世尊の御前